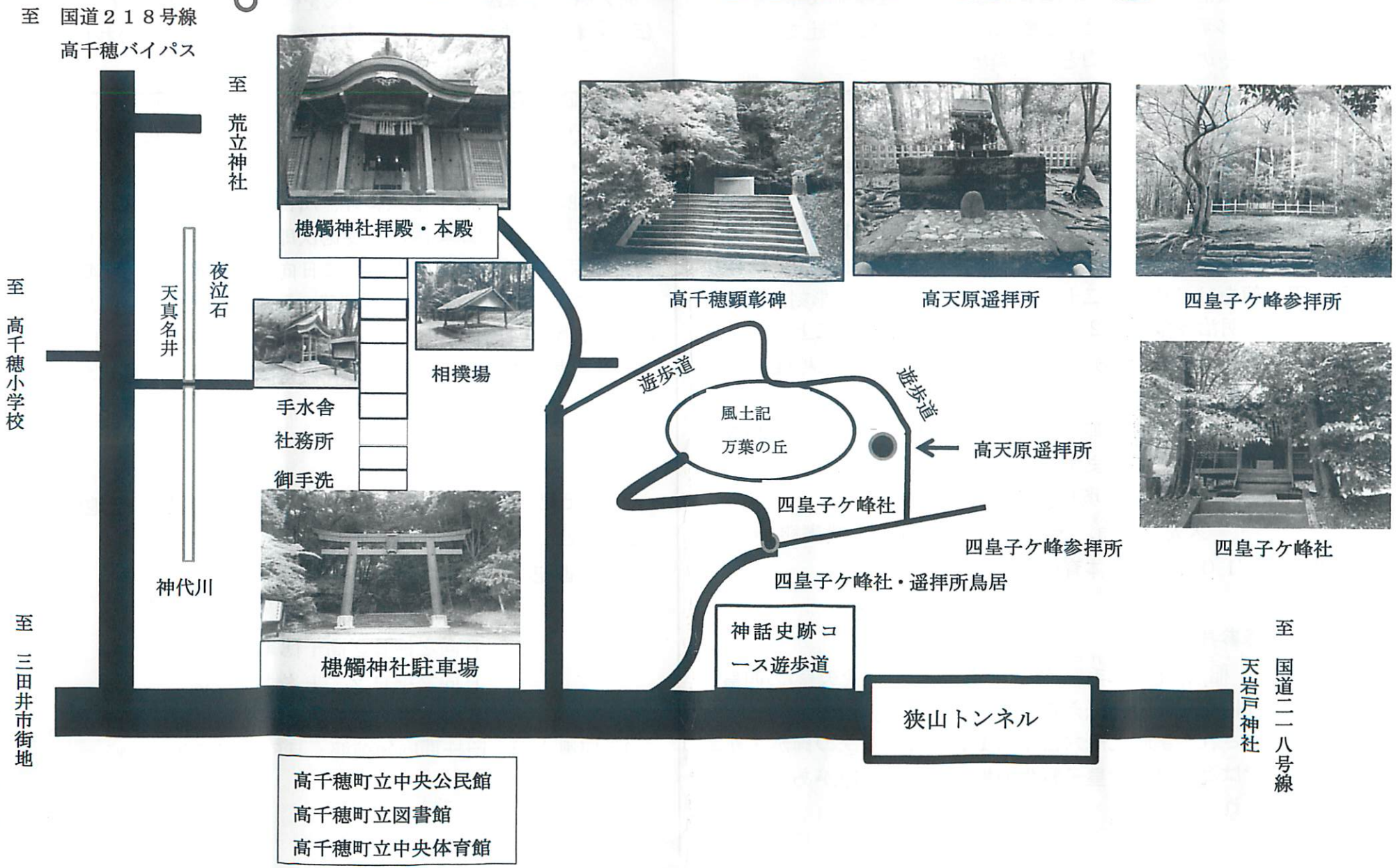
槌觸神社周辺の神話史跡散策案内図



【槵觸神社】

天孫天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命が降臨された「久士布流多氣〈日本書紀　槵觸峯〉」に鎮座する神社です。

古くは山そのものを神山として崇めていました。

元禄元年（１６８８）に延岡藩主有馬清純が社殿建築を許可しましたが、清純候は元禄５年に越前糸魚川へ転封となり、着手にいたらず、次の藩主三浦壱岐守明治敬の時、十社宮（高千穂神社）大宮司田尻乗信の願いにより、元禄７年〈１６９４〉６月１５日に造営遷宮されています。その後、宝暦１４年（１７６４）安永４年（１７７５）等に修復されています。本殿両袖周囲には昇り龍・下り龍をはじめ支那二十四孝物語の代表１５の彫刻が施されています。明治６年５月２５日、旧称槵觸大明神は二上神社と改称し、県社となりましたが、同４３年１１月１９日に槵觸神社と改称旧名に復しています。築後３００年を経て昭和４６年より、拝殿・本殿の屋根吹替え等を行い、参道入口の大鳥居は昭和５９年４月に竣工落成しています。

祭 神　天津彦彦火瓊瓊杵尊（日本書紀神名）

天児屋根命、天太玉命、経津主命、武甕槌命

例祭日　１０月祝日（体育の日）

【四皇子ケ峰参拝所】

五瀬命・稲氷命・御毛沼命・若御毛沼命(神武天皇)の四皇子がお生まれになった所と伝えられています。参拝所の西隅に昭和９年に建立された皇紀二千六百年（１９４０）記念の碑があります。県南では高原町に四皇子誕生の地として皇子原があり、狭野神社に祀られています。

【高天原遥拝所】

高天原から降臨された神々が天を懐かしみ、遥拝された所と伝えられています。天と地を結ぶパワースポットといわれます。

【風土記・万葉の丘】

高天原遥拝所中腹の丘は、近年高千穂神社後藤俊彦宮司が「風土記・万葉の丘」と名付けられています。

境内地の丘には高千穂顕彰碑、川田順歌碑、梅原猛氏植樹木があります。高千穂顕彰碑は甲斐徳次郎氏（旧岩戸村長・県議歴任郷土史家）の「皇祖発祥の聖地に日向風土記逸文、万葉集の古歌を刻した碑を建て、民族精神興隆の一基石となさん。」との提唱により、昭和41年２月11日に石碑が建立され、同年11月11日に名誉総裁高松宮宣仁親王殿下の御臨場を仰ぎ、除幕式が行われています。

《記紀神話・日向風土記に記された天孫降臨の聖地》

○古事記　筑紫日向之高千穂之久志布流多気

○日本書紀　日向之襲之高千穂峯

日向之高千穂之槵觸峯

日向之槵日之高千穂峯

日向之槵日之二上峯之天浮橋

日向之襲之高千穂添山峯（現　祖母山）

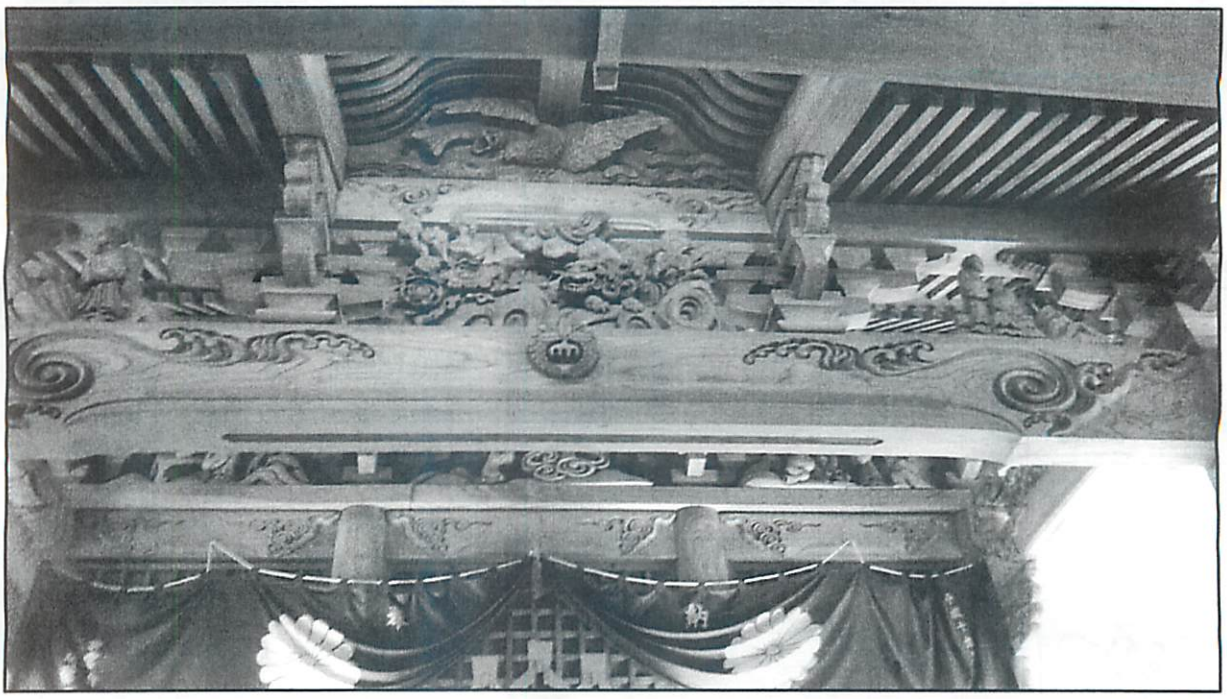
○日向風土記　臼杵郡内知鋪郷　日向之高千穂二上峰

椹觸神社本殿身舎の彫刻

※本殿身舎は奥の御鎮座を方位に関係なく東面と定め記した。

椹觸神社は元禄７年〈１６９４〉６月１５日　に造営され、その後宝暦１４年（１７６４）安永４年（１７７５）等に修復されている。本殿身舎（みしゃ）両妻飾・蟇股（かえるまた）には鳳凰、昇龍・降龍をはじめ、二十四孝（にじゅうしこう）の人物彫刻が施されている。二十四孝は古代中国において親孝行に優れた２４人の物語で、江戸時代には広く庶民に知られ、二十四孝を題材とした落語や浮世絵、御伽草子、寺子屋の教材にも用いられ、神社仏閣等の建築物にも人物像が施されるようになった。椹觸神社本殿身舎には本来１４人物像があったが、北面南側（向って左）蟇股（かえるまた）の大瞬像（だいしゅん）は盗難にあい、脇障子をはじめ１３の人物像が現存している。

拝殿側西正面の彫刻



拝殿側西正面の向拝（こうはい）柱鼻、虹梁（こうりょう）鼻には象・唐獅子がある。虹梁中央には延岡内藤藩の家紋「下がり藤」に椹觸の櫛が加えられ、虹梁上の懸魚に鷹、妻飾り中央に唐獅子、左に二十四孝の「仲由」、右に「唐夫人」が施されている。

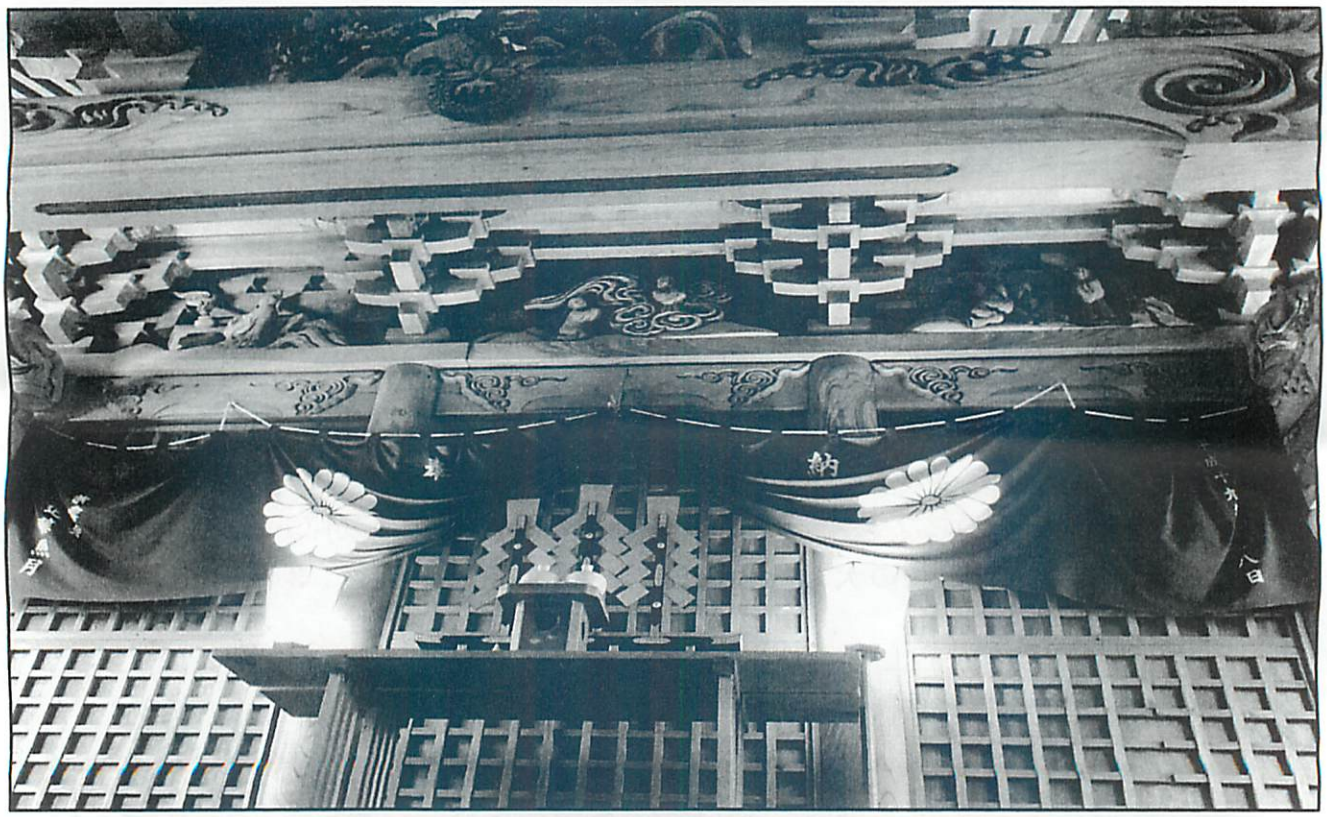
「仲由（ちゅうゆう）」参考絵図

孔子の弟子。米運びの賃金で父母を養っていた。父母亡後、楚国に仕え裕福になったが、貧しくとも父母に仕えたいと、叶わぬ願いに

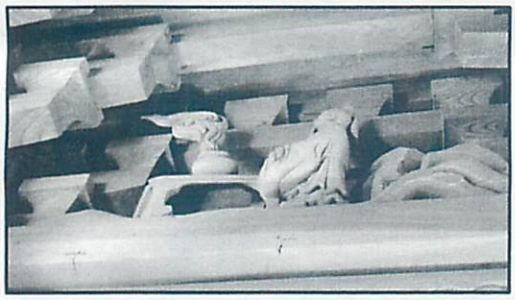
「唐夫人（とうふじん）」参考絵図

唐夫人は、姑の長孫夫人に歯がないので、いつも乳を与え、髪を梳く等、様ざまなことで仕えたという。

※絵図・・都会節用百家通絵鈔より引用

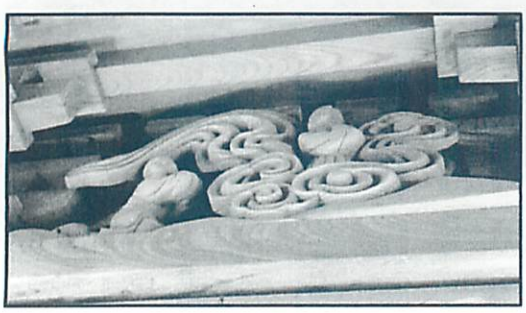


西正面蟇股の彫刻。左に二十四孝の「庾黔婁」、中央に「董永」、右に「陸績」がある。



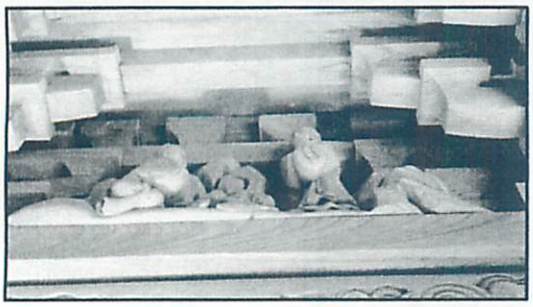
庾黔婁（ゆけんろう）

南斉の人で、漢時代の孱陵県（公安県）の役人。着任してすぐに胸騒ぎがして、父の病気と思い、退任して家に帰ると案の定大病を患っていた。北斗七星（北極星）に身代わりになることを祈り続けたという。



董永（とうえい）

幼い時に母と別れ、貧しさの中で病弱な父を養い、身売りをして父の葬式をした。身請人の所に行く途中で美女と出逢う。美女は董永の親孝行に感じ入った天帝が遣わした織姫で、董永の妻となり、董永に仕えた後に天に帰っていく。

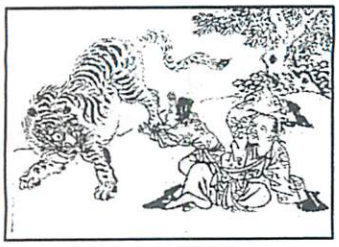


陸績（りくせき）

陸績は６歳の時に、袁術に仕えていた。袁術は陸績におやつとして蜜柑を与えた。三つ取って帰ろうとすると、袖から袖からいくつかの蜜柑が零れ落ちたため、袁術は咎めたが、母に食べさせ恩に報いようとする陸績の真意を聞き感心した。

身舎南面北側の彫刻（向かって右側.）

本殿身舎南面の上の部分に位置する二重虹梁妻飾りには、拝殿側を向いている鳳凰、背面側を向いている昇龍が彫られ、下の蟇股には左に二十四孝の揚香、右に郭巨、左脇障子には江革の彫刻がある。

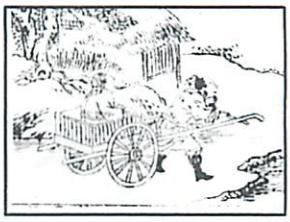


揚香（ようこう）

揚香と父が山に行った時、虎が現れ二人に襲いかかろうとした。揚香が、天の神よどうか私だけを食べ、父を助けてと願うと、虎は尻尾を巻いて逃げ去った。

郭巨（かくきょ）

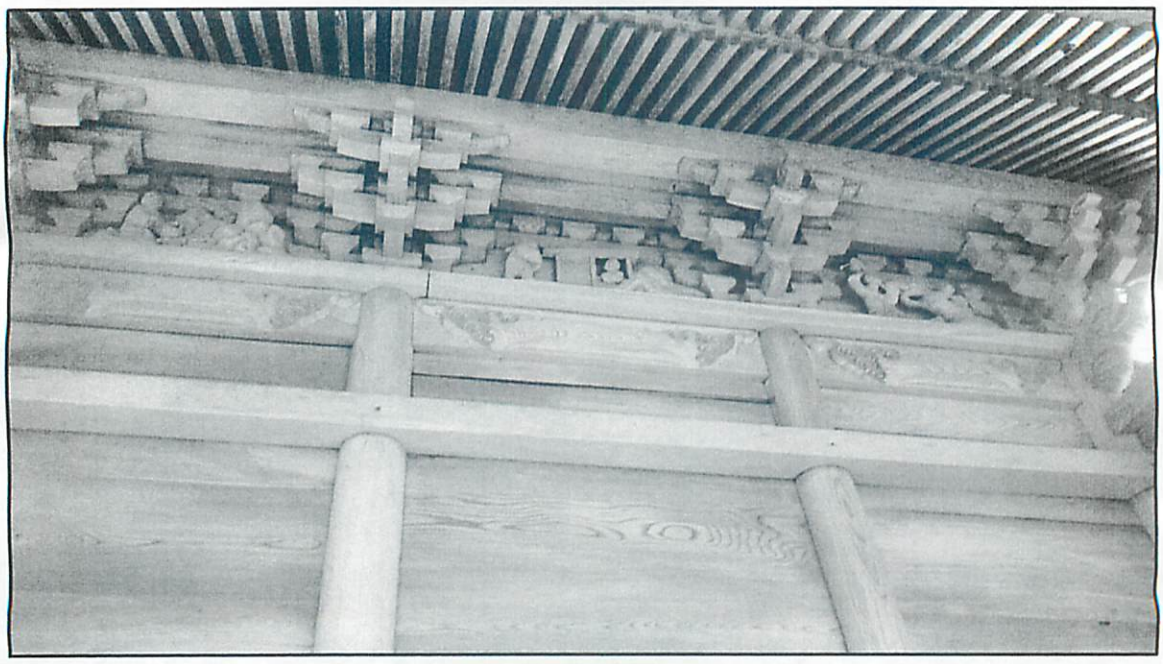
郭巨は妻・母と貧しい三人暮らしであった。子供が生まれ、母が自分の食事を孫に分け与えるため、子供はまた生まれるが、母親は二度と授からないといい、子供を埋めようとした。その時黄金の釜が出て、これを授けると天帝の言葉が記されていた。郭巨と妻は子供を連れ帰り、更に孝行を尽くした。



江革（こうかく）

江革はよく母に仕えた。国で戦いが起きたため、母を連れて他国に逃げようとした。その途中で盗賊に襲われ、江革だけさらわれそうになった。年老いた母親を置いていけないと訴えると、盗賊は親孝行な江革に感動し見逃してくれた。

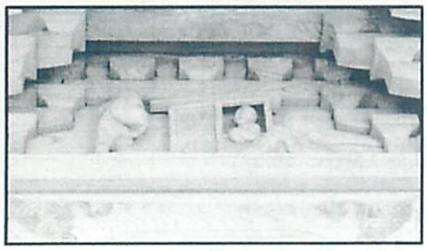
身舎背面の彫刻



蟇股に二十四孝の姜詩、曾参、老莱子の彫刻がある。

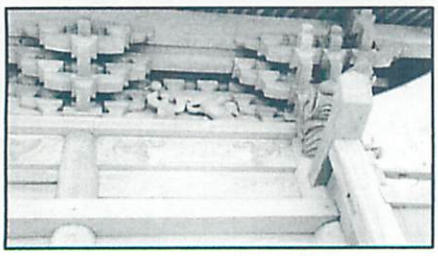
姜詩（きょうし）

姜詩の母は、いつも綺麗な川の水を飲み、魚を食べたいといっていた。そのため、姜詩と妻は遠くまで行き水と魚を与えていた。するとある時、家のすぐ傍に水が湧き、鯉がいた。夫婦の孝行に天が授けたものであろう。



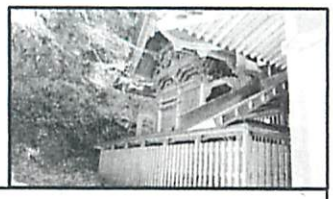
曾参（そうしん）

孔子の弟子の曾参は、ある時薪を取りに山に行った。母が留守番をしていると、曾参の親友が訪ねてきた。貧しくてもてなしも出来ないため、母は指を噛んで曾参の帰りを願った。薪を拾っていた曾参は胸騒ぎがして家に帰ると、母がいきさつを話した。親子の情と孝行の心の話し。

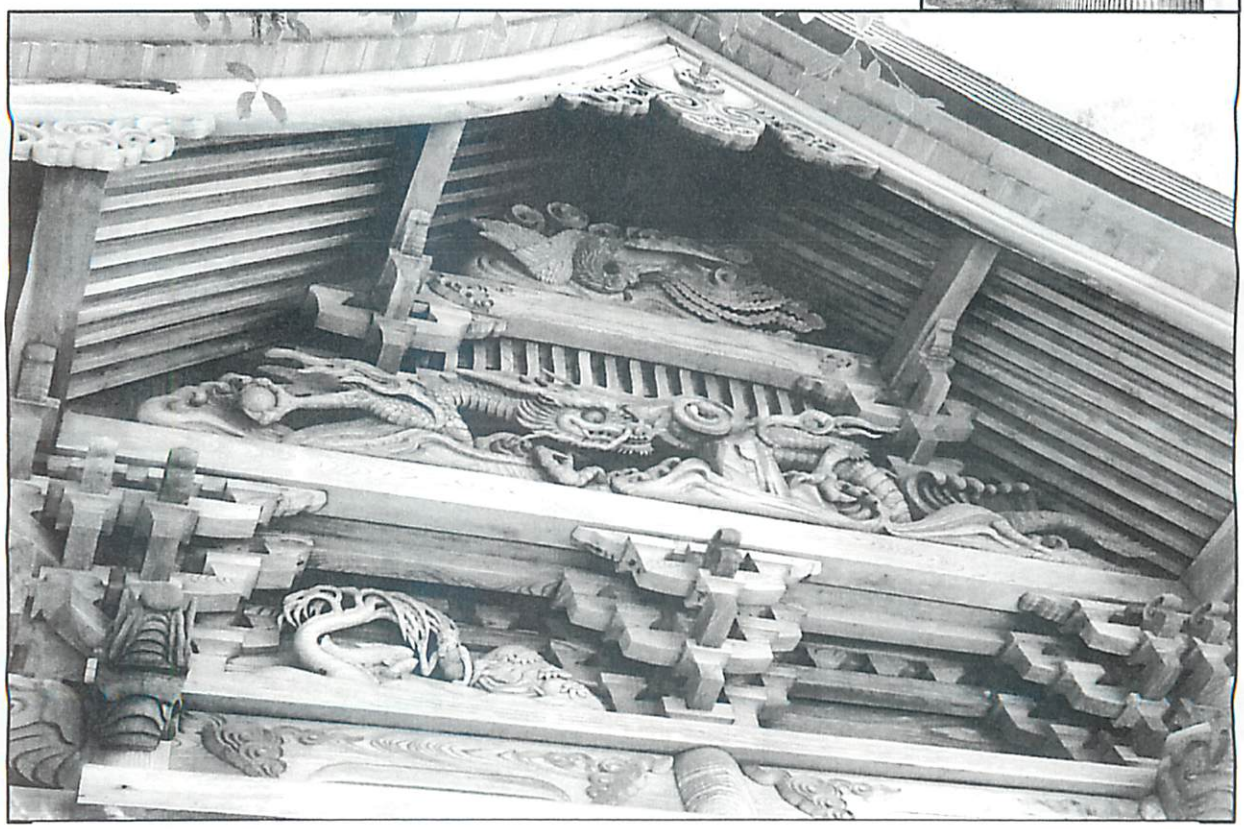


老莱子（ろうらいし）

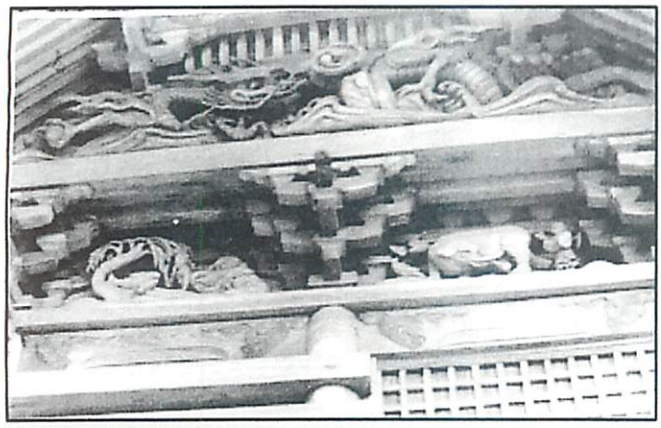
老莱子は７０歳になっても、子供のように派手な着物を着て遊び、愚かなる振舞をし、両親に食事を運ぶ時もわざと転んで泣いたりした。年老いた息子を見て、両親が悲しまないように、また親自身が年寄りになったと悲しまないように、こんな振舞をしたのである。



身舎北面南側の彫刻（向かって左側.）



身舎北面二重虹梁の上妻飾の鳳凰は背面側を向き、下妻飾の降龍は拝殿側を向き、天界の如意宝珠を持っている。蟇股左は二十四孝の王祥。右に大舜の彫刻があったが、大舜彫刻は盗難に遭い現存していない。右脇障子に孟宗の彫刻がある。



孟宗（もうそう）
孟宗は年老いた母を養っていた。冬に筍が食べたいというので竹林に行ったが、冬に筍があるはずはなく、涙ながらに天に祈り雪を掘った。するとあっという間に雪が融け、筍が沢山出てきた。

王祥（おうしょう） 母が冬の厳寒の頃に魚が食べたいといい、王祥は河に行ったが、氷に覆われ魚はどこにも見えなかった。悲しみのあまり、衣服を脱ぎ氷の上に伏していると、氷が少し解けて魚が二匹出てきたので、獲って帰り母に与えた。王祥が伏した所には毎年、人が伏せた形の氷

大舜（だいしゅん） 大舜の父は頑固者、母はひねくれ者、弟は能無しであったが、ひたすら孝行を続けた。大舜が田を耕しに行くと、象が現れて田を耕し、鳥も助けてくれた。大舜の孝行な心に感心した天子は、娘を娶らせ天子の座を譲った。